

「語録」を通じた「偉人化」の分析 —「アベノゴロクかるた」を事例に—

The Heroization of Figures through Analects: An Analysis centered on the "Abeno-Goroku Karuta"

桑畑 洋一郎¹

Yoichiro Kuwahata¹

¹山口大学 人文学部

¹Yamaguchi University Faculty of Humanities

要旨

本稿は、安倍晋三元内閣総理大臣の「語録」を基に作成された、「アベノゴロクかるた」の分析を通し、安倍元総理が、「語録」を用いていかに「偉人化」されていくのか、そのプロセスを分析するものである。また、安倍元総理の「偉人化」という事例を通して、個人が偉人として形成されていくプロセスの社会的背景と、「偉人化」の帰結について考察を行う。

結果、「アベノゴロクかるた」における「語録」には、〈焦点化〉・〈脱文脈化〉・〈漂白〉・〈痕跡の残置〉・〈再文脈化〉という5つの選定基準があることが示唆された。

また、こうした基準の下で「語録」が選定されることにより、言うならば、〈理念型としての安倍元総理〉が築き上げられ、より多くの人々に受容可能な人物として——すなわち「偉人」として——位置付けられていることが示された。

1. はじめに

1.1. 問題の所在とその社会的背景

本稿は、安倍晋三元内閣総理大臣の「語録」を基に作成された、「アベノゴロクかるた」の分析を通し、安倍元総理が、「語録」を用いていかに「偉人化」されていくのか、「語録」の選定プロセスを通して分析するものである。また、安倍元総理の「偉人化」という事例を通して、個人が

偉人として形成されていくプロセスの社会的背景と、「偉人化」の帰結について考察を行うものでもある。

本稿で注目する「アベノゴロクかるた」とは、安倍元総理の「語録」を基にして作成されたかるたである。現在もweb上で通信販売が行われており（アベノグッズ, 2025）、発行者は安倍元総理の妻である安倍昭恵氏である。かるたの位置づけとしては、上記通信販売サイトにおいて以下の通り述べられている。

伝説の総理が「かるた」になった。憲政史上最長の

政権を張り、多くの功績と足跡を^{ママ}の残した安倍晋三元総理。数々の名言、名演説、感動のスピーチを満載した究極のかるたがついに登場！

このかるたは2024年9月20日に、安倍昭恵氏のオフィシャルサイト（安倍昭恵のスマイルトーク, 2024）で販売開始されたことが公知された。また、それと時を前後して、吉田真次衆議院議員¹⁾や杉田水脈元衆議院議員など、安倍元総理と近しくかつ山口県にゆかりのある国会議員らが、このかるたで遊ぶ様子をSNS上に投稿した²⁾。他方で、安倍元総理に批判的な立場の人々も、例えばX（旧Twitter）上で「#アベノゴロクかるた」というハッシュタグを用いて、独自の「語録」を揶揄的に投稿するなど、盛り上がりを見せた。

そもそも安倍元総理は、周知の通り毀誉褒貶の多い人物であり、近しい立場の人々からは「偉人化」がされてきた。本稿で扱うかるた以外にも、山口県においては、例えば萩市の松陰神社の歴史館には、安倍晋三の人形が――菅直元総理を除いた他の山口県出身総理大臣の人形と共に――展示されている（2023年12月16日付『朝日新聞』）。逝去後、国葬儀のみならず山口県においては県民葬が開かれ、多くの県民が追悼したことも記憶には新しい。また先に触れたように、この「アベノゴロクかるた」をSNSで取り上げた（元）議員たちが山口県選出議員であるといったことを踏まえると、安倍元総理を「偉人化」する機制は、とりわけ山口県において強く見られるものと言える。その点で、安倍元総理の「偉人化」は、山口という地域の特性を反映した事象であると言える。

もちろん他方でこの「偉人化」は、山口県に留まるものでもなく、全国的な広がりも見せており、その点も興味深い。例えば「偉人」を超えた神格化ではあるが、長野県下伊那郡に、安倍元総理をまつた「安倍神像神社」が存在することも挙げられる（安倍神像神社, 2024）。こうした安倍氏の「偉人化」は現在の政界にも見られ、例えば高市早苗総理大臣も、2025年10月24日の所信表明演説において、安倍元総理の言葉を引用している。この演説を指して、産経新聞では、高市総理が「安倍外交を手本とし、回帰する姿勢を打ち出した」（2025年10月24日付『産経新聞』）と評している。

また他方では、安倍元総理と立場を異にする人々からも、上述の通り揶揄的にではあるが今も「語録」が共有されている。

以上のように安倍元総理は、「偉人」としての認識が――悪印象を強く残した人物もある種の「偉人」と見なすとするれば――山口県を中心として、日本全国において今も広く共有されている人物であり、かつ「偉人化」が今も進められている人物であると言えよう。こうした、安倍元総理の「偉人化」・神格化現象に注目し、日本経済新聞において「迫る個人崇拜の足音」（2025年2月4日付『日本経済新聞』）という記事も出されており、安倍元総理の「偉人化」は、その死後も現代社会において関心をひき続けている。2.1でも概観するように、対象人物の死後にこそ「偉人化」がなされることを踏まえれば、安倍元総理が死後いかにして「偉人」とされていこうとするのか、まさに「偉

人化」がなされている現在においてこそ、そのプロセスを検討する意義がある。

1.2 本稿の問題意識と、「山口学」における意義

しかしながらそもそも、人はいかにして「偉人」になるのか。そこにはもちろん、当該人物のカリスマ性や功績といった、当人の内から出てくる要素も影響していると思われるが、一方で、「語録」がかかるたとなったり、神社が作られたり、特定の基準の下で人形が展示されたり、批判的な立場からも「語録」が語り継がれたりといった例を見ると、「偉人化」とは、当人の外に存在する要素や、その要素を当人以外の主体によって再編され提示されることによっても成立しているものであると考えられる。

ではそうした、当人の外に存在する要素の、当人以外の主体による再編と提示はいかになされ、そこから「偉人」がどのように形成されるのか。このことを、「語録」を基にしたかるたを事例として問うていこうとするのが、本稿の問題意識である。なお本稿における「偉人化」とは、民俗学者の及川翔平（2017）による定義を援用する。すなわち、対象への賛否に関わりなく、特定の対象の「パーソナリティにすぐれたなにかを読み込み、当該人物を常人からは突出した人物であると捉え、人物を表象化していく動態及びその結果」（及川, 2017: 4）を「偉人化」と捉える。

本稿が具体的な分析対象とする「アベノゴロクかるた」の基となった「語録」の生みの親である安倍元総理が、死後、「偉人化」されようとしていることは上述の通りである。他方、次節で確認する通り、主に歴史学・歴史社会学的アプローチからは、ある人物が「偉人」とされる際に発動されるさまざまな政治的力学が明らかにされてきた。そう考えると、「偉人」は、「偉人」であったから「偉人化」されるのではなく、「偉人」とすることに何かしらの社会的機能があったから「偉人化」されるものであると言える。本稿はこうした、「偉人化」の社会的機能の一端を、「アベノゴロクかるた」による安倍元総理の「偉人化」プロセスを事例として考察しうる点に意義があると言える。

また、毀誉褒貶はあれども、広くその「偉人」性が共有されている安倍元総理が「偉人」と化していくプロセスを検討することは、山口に根差した「偉人」像の研究として、すなわち「山口学」としても意義がある。山口にもルーツを持ち、とりわけ山口で「偉人化」されようとしている人物に着目し、そうした人物がいかに「偉人」とされていく

のか、そのことを問うことは、山口という地域の特性を検討する上で、重要なこととなる。

2. 先行研究の検討

ここでは、本稿に関連する先行研究を、いくつかの角度から検討することとしたい。

2.1. 「偉人」が形成されていくプロセス

まずは本稿で主題の1つとなる「偉人」についての研究を検討する。

「偉人」が形成されていく「偉人化」については、主に歴史学的な立場から、特定の人々が「偉人」とされていくプロセスが検討されてきた。例えば中内敏夫(1988)や上野英信(1989)、あるいは山室建徳(2007)、増子保志(2015)は、いわゆる「肉弾三勇士」などが「偉人」として扱われ、それが「軍国美談」として構築されていくプロセスを論究している。こうした研究においては、特定の人々についてのエピソードが、誇張や虚偽交じりで共有されていくことにより、特定の人々が「偉人」とされていくことが示唆された。また加えて、そうして作り上げられた「偉人」像が、国民において共有されることにより、国家的イデオロギー装置として機能することも指摘している。

また、民俗学者の及川翔平(2017)は、様々な事例を通して、特定の人物が「偉人」として崇拜されることの社会的機能を検討している。本稿冒頭で見たように、及川はまず、「偉人化」を、対象への賛否に関わりなく、特定の対象の「パーソナリティにすぐれたなにかを読み込み、当該人物を常人からは突出した人物であると捉え、人物を表象化していく動態及びその結果」(及川, 2017: 4)と定義する。

その上で及川は、上記の「軍国美談」の範疇にはとどまらない「偉人化」のプロセスも含めて、「人が『神』や『偉人』へと変貌していく表象化の過程」(及川 2017: 2)及び「そのような表象化を導く主体の眼差しあるいは認識」

(及川, 2017: 3)を検討した。及川が対象としたのは大岡忠相や徳川家康、武田信玄といった、各地域で「偉人」として想起や祭祀の対象となる人々である。及川はこうした検討を通して、個人が「神」や「偉人」として記憶に留められ、そうして記憶に留められた死者が社会統合の資源として活用されたことを指摘した。

以上のように、個人が「偉人」と化していくプロセスの研究は、一定程度の蓄積がなされてきた。本稿もこうした研究の蓄積を受け継ぐ部分も多い。具体的には本稿でも、及川の「偉人化」定義に倣い、「パーソナリティにすぐれたなにかを読み込み、当該人物を常人からは突出した人物であると捉え、人物を表象化していく動態及びその結果」とする。

他方で本稿は、現代においてまさに今「偉人」とされていこうとしている点で、これらの研究とはまた違った対象を取り上げ検討することとする。この点において本稿は、これまでの「偉人」研究とは異なる新たな知見を得られる可能性を有している。

2.2 かるたというメディア

続いて、本稿が分析対象とする具体的な器物であるかるたというものの意味を把握するために、かるたについての先行研究をいくつか見ておきたい。

かるたは、主にその教育的効果に注目する立場から、教育学者らによって研究がされてきた。例えば小松清生(2025)や石橋愛架(2025)は、教具としてかるたを位置づけ、その意味を検討している。こうした研究によって、かるたとは、書かれた語や文章を、その背後にある規範も含めて、遊びを通して修得していくことが可能なものであることが指摘された。

またそうした視点をさらに発展させ、かるたの持つプロパガンダ装置としての側面を明らかにした研究もある。M. Kelly(2022)は、戦時中に日本で流通していたかるたに着目し、戦時におけるかるたの機能を明らかにした。Kellyによるとかるたとは、それで遊ぶことにより、かるたを楽しむ子どもたちに帝国主義のメッセージが植え付けられることとなり、そこから小国民としての意識が涵養されていくこととなっていた。

以上のようにかるたとは、単なる遊び道具でもなく、また、かるたに記された絵や文字の修得のみを目的としたものでなく、そこに描かれた事柄の背景や、それを導き出した規範も含めて、遊び手に修得させる機能を有するメディアであると言える。

そこで本稿でも、「アベノゴロかるた」についても同様の機能を持つものと捉え、この「アベノゴロかるた」が、文字や絵を通して伝えようとしていたメッセージを把握することとしたい。

2.3 「語録」というもの

最後に、本稿が分析対象とするかるたの源泉となっている「語録」についての先行研究も検討しておきたい。

「語録」については、主に宗教学的立場から、文献学的な研究が蓄積されてきた。古典的なものとしては後藤光村(1926)による臨済語録の研究があり、近年でも原口尚彰(2014)によるトマス福音書の研究がある。これらは、人々が既に信仰対象としている——すなわち既に「偉人」となっている——特定人物の言葉の意味の解釈をめぐる研究であると言え、本稿で見ると、今まさに「偉人」とされようとしている人物の「語録」とはやや状況が異なる部分がある。とは言えこれらの研究は、「語録」の解釈が「偉人化」を促進しうることを示唆するものであり、「偉人化」プロセスにおける「語録」の重要性を提示してくれているといえる。

また他方で、「語録」の記述を用いて、内容分析や言説分析を行う研究もある。例えば大蔵誠(2025)による江田五月の語録を用いた研究や、長浜博(2023)による上原輝男の語録を用いた研究がそれである。これらの研究においては、「語録」で示されたことを通して「語録」の元の「語」を残した人物の検討をしようとするものである。

本稿で特に示唆に富むのは、「語録」の解釈と「偉人化」プロセスとの関連性を検討する、後藤(1926)や原口(2014)らの研究である。すなわち、既に述べた通り、「語録」の解釈如何によって、その「語録」の元の「語」を残した人物の「偉人化」が促進されることが、前者の研究からは示唆されている。「アベノゴロクかるた」の分析を通して、安倍元総理の「偉人化」プロセスを探ろうとする本稿の問題意識の妥当性は、こうした研究からも裏付けられる。

なお、国立国会図書館で、「語録」をタイトルに含む図書を検索すると、2025年11月26日現在で1,816件となる。したがって「語録」を修正した図書は一定程度存在するのだが、その内容を新しい順に見てみると、『ミキティ語録2』、『頭山翁語録』、『坂本龍一語録』、『石破茂語録』、『禅宗語録入門読本』などとなる。つまりは、当然ながら、「語録」が作成できるほどに発言した「語」が記録されている、政治家・宗教家・芸能人・事業家といった立場の者の方が「語録」が作成されやすいと言える。

他方、同じく国立国会図書館で「かるた」をタイトルに含む文書・図像類を検索すると2025年11月26日現在で

248件であった。さらにこの中から、個人がかかるたになったものを抜粋すると、『近江の聖徳太子和かるた』、『吉野作造かるた』、『元三大師かるた』、『シェイクスピアカルタ』、『生誕350年芭蕉奥の細道俳句かるた』、『紀行300年芭蕉奥の細道俳句かるた』、『松尾芭蕉「奥の細道」かるた』などとなる。つまりは、これも当然だが、個人を題材とした「かるた」を作成するためには、「かるた」の素材となりうる、当該個人の発言や作品等が文字化された記録——シェイクスピアの諸作品や松尾芭蕉の俳句など——を多く残しており、かつその素材がかかるた向き——作品中の名台詞、あるいは俳句そのもの——であり、さらには、絵札に向いている素材があることが必要となる。すなわち、かるたの素材になりそうな、切り取りができる名言を多く残しており、何かしらの見映えを必要とするのがかるたである。おそらくこうした点と関連して、現代の政治家で、個人の「語録」がかかるた化しているのは、管見の限り安倍元総理のみである。この点で安倍元総理は非常に特異な政治家であり、その「語録」やあるいは何かしらの見映えの点で、他の政治家と一線を画していると言える。この点からも、「アベノゴロクかるた」に着目する本稿の独創性が指摘される。

3. 分析

ここからは実際に「アベノゴロクかるた」を対象とし、かるたで用いられている「語録」の内容を、計量的方法と質的方法を用いて分析する。

3.1. 分析対象の概観

まずは分析対象の概観をしておきたい。対象とする「アベノゴロクかるた」は、「い」から「京」までのいろは48文字からなっている。それぞれが絵札と読み札に分かれている。絵札は、主に政治家など著名人の似顔絵を多く描いている——またその中でも安倍元総理の似顔絵を多く手掛けてきた——本間康司によって描かれている。読み札の選び手は明示されていないが、発行者に安倍昭恵氏も入っていることから、昭恵氏を含めた安倍元総理に近い人物が選別した「語録」からなっていると思われる。

読み札の文章を計量テキスト分析ソフトKHCoder3で分析した結果、総抽出語数は999語、異なり語数は393語であった。それほど大きなサイズのデータではないが、頻出10語を示すと以下の通りとなる。

表 1 「アベノゴロかるた」の頻出10語

抽出語	出現回数
思う	7
日本	7
国	6
結果	4
言う	4
一番	3
花	3
経済	3

失敗	3
人	3

また、これもそれほど大きなサイズのデータではないので、単なる概観に留めるが、語同士の結びつきをネットワーク図として示すと以下の図のようになる。なお、図の作成に当たっては、語の共起を表す Jaccard 係数³⁾が 0.2 以上のもののみプロットしている。また、出現回数が多い語ほど大きな円で示されており、語同士の結びつきが強いほど語同士を結ぶ線が濃くなるようにしている。

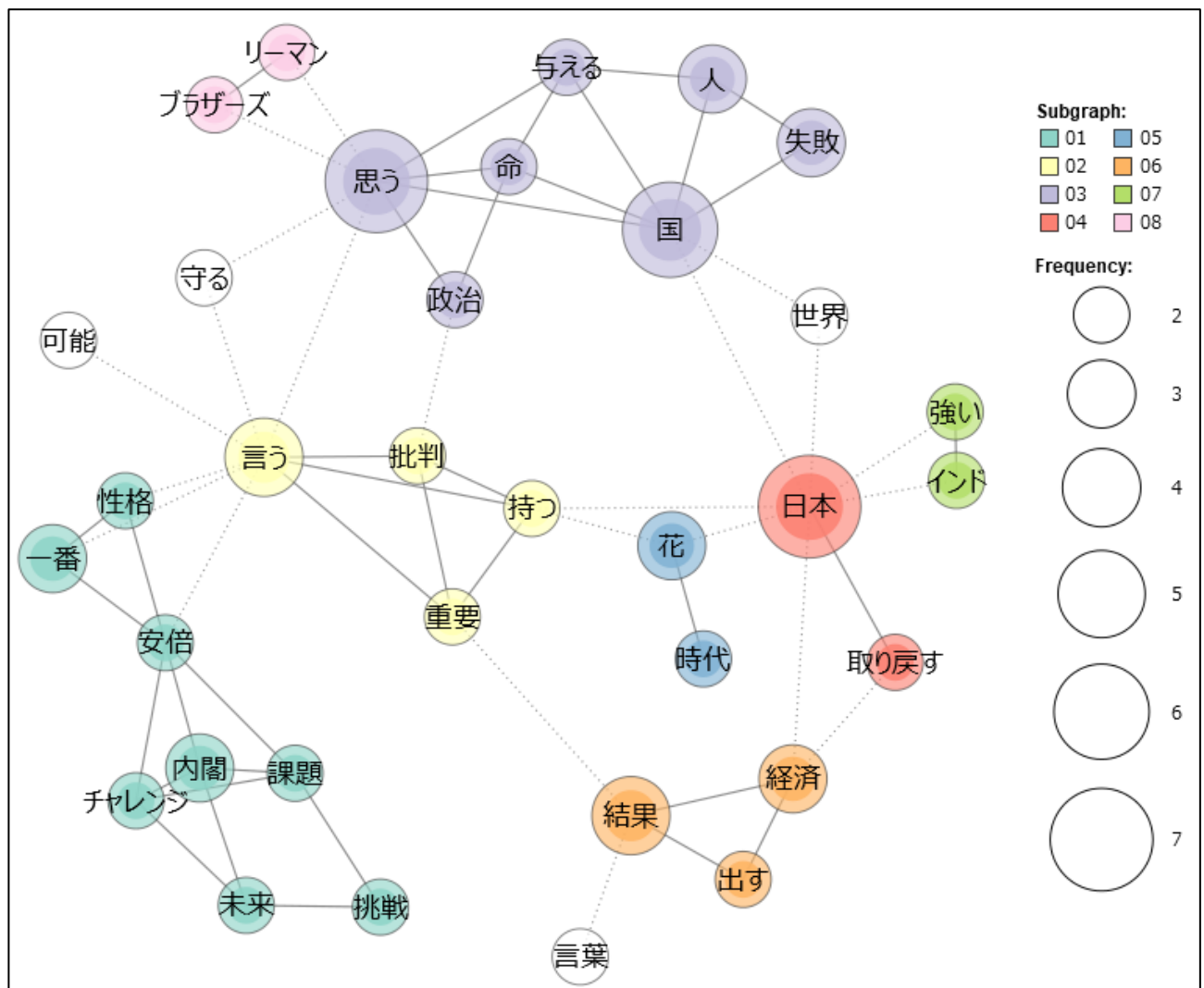


図 1 語同士のつながり

図1を見るに、「内閣」としての「課題」に「チャレンジ」してきたことと関連する「語録」が特徴的に用いられていること(図左下部)、また、「経済」で「結果」を「出す」といった自負を示す「語録」が用いられていること(図中央下部)がうかがえる。その他のものは「日本」を「取

り戻す」や「リーマン」「ブラザーズ」のように、慣用的な語であったり固有名詞であったりといったものが図示されている。

3.2. 計量的な分析：元の「語録」の初出年

以上のように概観を行った上で、ここからは「アベノゴロクかるた」そのものに踏み込んだ分析を行う。まずは、「アベノゴロクかるた」に収録されている48の「語録」が、元々はいつ発せられたものなのかを、単純な計量的分析から見ていきたい。安倍元総理をめぐる主要な出来事を記した年表⁹⁾を元に、「語録」の元発言がなされた年を記載すると以下の表のようになる。

表 2 安倍元総理関連年表と、各年初出の「語録」数

年	出来事	「語録」数
1954	安倍晋三誕生。	
1977	成蹊大学卒業。	
1979	神戸製鋼入社。	
1982	父(安倍晋太郎)の秘書官に。	
1987	安倍昭恵と結婚。	
1991	父死去。	
1993	初当選。	1
2000	官房副長官就任。	
2002	小泉純一郎総理と訪朝。	
2003	幹事長就任。	
2005	官房長官就任。	
2006	自民党総裁に。第1次内閣。	2
2007	国民投票法制定。自民党大敗。内閣総辞職。	1
2008	解説書には年表の記載なし。	
2009		
2010		
2011		1
2012	自民党総裁就任。衆院選に勝利。第2次内閣。	3
2013	TPP参加。参院選勝利。東京五輪決定。特定秘密保護法制定。	8
2014	消費税8%に。内閣人事局発足。集团的自衛権。衆院与党2/3。第3次内閣。	3
2015	アメリカ両院で演説。戦後70年談話。総裁選再選。安全保障関連法。	2
2016	G7伊勢志摩開催。オバマ大統領広島訪問。改憲勢力2/3。天皇退位表明。プーチン大統領来日。真珠湾訪問。	5
2017	譲位特例法制定。テロ等準備罪成立。衆院単独過半数。第4次安倍内閣。	5
2018	総裁選3選。中国公式訪問。	2
2019	「令和」発表。皇太子即位。トランプ大統領来日。G20大阪開催。参院自公過半数。消費税10%。在任歴代最長。	1

2020	小中高一斉休校。東京五輪延期決定。緊急事態宣言。連続在任歴代1位。辞意表明。内閣総辞職。	4
2021	インド国家勲章授与。「世界の政治家」選出。YouTubeチャンネル開設。安倍派会長就任。「台湾有事」発言。	2
2022	防衛費2%発言。死亡。国葬儀と県民葬。	4
2023	解説書には年表の記載なし。	1
不明 ⁵⁾		2
不特定 ⁶⁾		1

以上を見ると、「不明」と「不特定」を除けば、「語録」の元となった45発言は全てが1993年の初当選後に生まれたものであり、またその中でも、2006年の総理大臣就任後の発言が44、第2次政権後が40発言と、かなり偏りがあることがうかがえる。また加えて、民主党が与党であった時期の、とりわけ2009年から2011年は「語録」として使用されている発言が1つのみであり、その使用されている1つも、民主党政権から自民党政権への政権交代のきっかけとなった野田佳彦元総理との党首討論における「それは約束ですね、約束ですね、よろしいんですね、よろしいんですね」という発言となっている。つまりは、かるたを通して安倍元総理の「語録」として記憶されるべきものは、国会議員となった後の、それも一度政権を失ったあとに政権復帰を果たした時期の発言とされていることが見てくる。

以上より、安倍元総理という「偉人」が形成される際には、国会議員であることかつ政権交代後の第2次政権以降に〈焦点化〉されていることとなっていると言えよう。無数に存在する元発言の中から、特定の時期に集中して「語録」を選定することにより、発言者の安倍元総理の性格もまた、特定の時期に〈焦点化〉されることとなっている。

3.3. 質的な分析1：元発言との差異

続いては、「アベノゴロクかるた」に対する質的な分析を行う。このかるたには、安倍元総理の「語録」が用いられているが、収録に際して改変が施されているものも多い。つまりは、元発言が「語録」になる際に、発言が変化しているものも一定数ある。

もちろん例えば、「TPPは正に『国家百年の計』であります」2015年10月16日の首相官邸における記者会見での発言(田中明彦研究室, 2025a)が、「アベノゴロクかるた」

では「TPP はまさに国家百年の計であります」となったように、鍵括弧が外されたり、漢字が平仮名になったりといった細かな修正も施されている。ただしこの節で注目したいのは、より大きな修正が施されているものである。

大きな修正が施されているものとしては、次のようなものがある。例えば「アベノゴロクかるた」では「今こそ戦後レジームを大胆に見直し、新たな船出をすべき時が来ている」とされたものが、元発言の2007年1月施政方針演説を見ると、「今こそ、これらの戦後レジームを、原点にさかのぼって大胆に見直し、新たな船出をすべきときが来ています」(田中明彦研究室, 2025b) なお、下線部がかかる点と異なる部分である。以下同様)であったことが分かる。

あるいは、2022年の近畿大学卒業式におけるスピーチとして、「アベノゴロクかるた」では「不可能と言われた総理への再登板がなぜ可能となったか。それは決して諦めなかったからであります」という発言が「語録」として収録されているが、これも元発言に当たると、「なぜ不可能と言われた総理への再登板が可能となったか。それは決して私が特別優れた人間だったからではありません。残念ながら特別強かったからでもない。ただ一点決して諦めなかったからであります」(近畿大学, 2022) というものであった。

他にも、戦後70年談話発表時の会見での「戦争に関わりのない世代に謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」という発言が「アベノゴロクかるた」には収録されているが、これも元発言は「あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」(ANNNewsCH, 2015) というものである。

以上のように、単なる表記の調整に留まらない改変が施された上で収録された「語録」もある。ではこうした改変によって一体何が生じているのか、

2007年1月施政方針演説で施されている大きな改変は、「これらの」「原点にさかのぼって」といったものの削除である。また、近畿大学卒業式スピーチにおける改編では、安倍元総理自身の謙遜も交えた自己言及の部分が削除されている。最後に、戦後70年談話発表時会見における改編は「あの」「私たちの子や孫」「そしてその先の」「子どもたち」といったものが削除されている。改めて眺めると、こうした改変に共通するのは、「これらの」「あの」といった、言及対象の事象を限定させる指示語や、「原点

にさかのぼって」「そしてその先の」といった言及対象の時制を確定させるフレーズ、またさらには、安倍元総理自身の自己言及や「私たちの子や孫」といった言及対象者を確定させるフレーズである。

すなわち、これらの改変によって行われていたのは言及対象を確定させる語や表現の削除であり、それによって、実際の発言が帯びていた具体性が捨象され抽象化されることである。元々の発言が有していた文脈が外され、特定の文脈に留まらず適用可能な範囲を拡張する改変が行われていると言える⁷⁾。安倍元総理が「偉人」化される際には、元発言が有していた具体的文脈から一般的文脈に置き直すことで「語録」を形成する、(脱文脈化) がなされていたと言えよう。

3.4. 質的な分析2: 他の「語録」との差異

続いての分析に移りたい。本節では、他の「語録」と「アベノゴロクかるた」との差異に注目し、他では「語録」として選定されているにもかかわらず「アベノゴロクかるた」には選定されていないものを見ていく。すなわち、「語録」となりうるポテンシャルを有していると判断されうるものであるにもかかわらず、「アベノゴロクかるた」においては選から落ちた「語録」の共通点を見ていくことで、「アベノゴロクかるた」の選定基準を析出することとしたい。

安倍元総理は、既に2.3節で述べたように「語録」とされてしかるべき語を多く残した政治家の1人である。したがって、「アベノゴロクかるた」以外にも、『若者が選んだ安倍晋三100のことば』(安倍晋三デジタルミュージアムプロジェクト, 2024) や『安倍晋三100の言葉』(別冊宝島編集部編, 2024) といった、いくつかの「語録」を集めた書籍が作成されている。また、安倍元総理に支持的な立場から編まれた雑誌『Will』においても「語録」を集めた特集が組まれている(2022年11月号)。

しかしながら、これら他の「語録」にはあるものの、「アベノゴロクかるた」にはない語録も複数ある。「語録」の数や目的が異なる以上当然のこととは言え、この差異を見ることが、「アベノゴロクかるた」の選定基準が何かしら見えてくることが期待できよう。

こうした目的の下、他の「語録」にはあるものの「アベノゴロクかるた」にはない発言の内、注目すべきものを以下の表3のようにまとめた。なお、分類名は筆者による。

表 3 他の「語録」にはあるがかるたにはない発言

分類名	発言
第1次政権	・挫折によって、私は、やはりもう一度、国のために尽くすとはどういうことだということを深く考える時間が与えられたな、このように思います。(安倍晋三デジタルミュージアムプロジェクト 2024: 82)
持病	・難病から回復して総理大臣となった私には、天命とも呼ぶべき責任があると考えます。(別冊宝島編集部編 2024: 14)
戦争	・御霊を悼んで平安を祈り、感謝を捧げるに、言葉は無力なれば、いまは来し方を思い、しばし瞑目し、静かに頭を垂れたいと思います。(別冊宝島編集部編 2024: 42)
家系・家族	・祖父や父を前に「アンポ、ハンタイ、アンポ、ハンタイ」と足踏みすると、父や母は「アンポ、サンセイ、といいなさい」と、冗談交じりにたしなめた(別冊宝島編集部編 2024: 68)
対メディア	・私も NYT と提携している朝日新聞に徹底的にたたかれました。だが、私は勝った(『Will』編集部編 2022: 193)
疑惑	・私も妻も一切、この認可にもあるいは国有地の払い下げにも関係ないわけで、私や妻が関係していたということになれば、私は、間違いなく総理大臣も国会議員も辞めるということをはっきりと申し上げておきたい(『Will』編集部編 2022: 193) ・政策論争では勝てないと思ったからこそ、モリ・カケなどの“創られた疑惑”追及に方針転換したのかもしれない(恩蔵 2022: 200)
対野党	・これは戦後の歴史から、日本という国を日本国民の手に取り戻す戦いがあります(恩蔵 2022: 197)
改憲	・時代にそぐわない(憲法の)条文として典型的なものは九条だ。日本を守る観点や、国際貢献を行う上で改正すべきだ(恩蔵 2022: 196) ・2020 年を新しい憲法が施行される年にしたいと強く願っている(恩蔵 2022: 199)

以上を見ると、他の「語録」にはあるものの「アベノゴロクかるた」においては選出されていないものとしては、「語録」を受け取る側の立場によっては受容しがたい面もある発言(「戦争」「家系・家族」「対メディア」「疑惑」「対野党」「改憲」と、安倍元総理の傷や弱み、瑕疵と見なされうる発言(「第1次政権」「持病」)であると言える。また後者と関連して、本稿冒頭で触れた、X(旧 Twitter)上で「#アベノゴロクかるた」というハッシュタグと共に揶揄的に投稿されている「語録」には、「意味のない質問だよ」といった安倍元総理の野次や、「立法府の長」といった発言も、「アベノゴロクかるた」には収録されていない。これらもまた、安倍元総理の傷や弱み、瑕疵と見なされる発言の一種と言えるだろう。

すなわち、「アベノゴロクかるた」においては、評価が割れそうな発言を避け“色”を消し価値中立化することで、できるだけ多くの者に受容されやすくなるようなものが選定される傾向にあると言えよう。これは前節で見た〈脱文脈化〉の派生形ではあろうが、こうした〈漂白〉とでも言うべき基準も、「語録」の選定において——作り手の意図は判然としないが——見出すことができる。

3.5. 質的な分析3：見えなくされた文脈の痕跡

3.3 節と 3.4 節で見てきたように、「語録」の選定時には、元発言を〈脱文脈化〉し、さらには評価が割れそうな発言を採用しないという〈漂白〉がなされていた。「アベノゴロクかるた」に収録された「語録」は、以上のように元の文脈が見えないようにされていると言える。

しかし他方で、元の文脈は見えないようにされているものの、「語録」の出所を追うという手間をかけることで、むしろ濃い色がついた文脈から「語録」が選定されていることも見えてくる。

例えば「重要なことは結果だ」という「語録」がかるたにはある。この文章だけ見れば当然のことを言っているにすぎないが、この発言は、民進党(当時)の蓮舂代表に対して「民主党政権の3年3か月、22億円どころか、児童扶養手当はたったの1円も引き上がりませんでした」と、国会論戦で述べた上で出てきた言葉である。

また、「国のために絶対やらないといけな法律なんだから」という「語録」もある。これもここだけ見れば何の法律を指しているか理解できないが、元発言は特定秘密保護法の議論の際に出てきたものである。

またさらにこのかるたには、批判も多く集めた——ゆえに〈漂白〉の対象となりうる——「桜を見る会」での発言も、発言の文脈が、かるた上には明示されないまま、2つ「語録」として収録されている

つまりは、〈脱文脈化〉による一般化や、〈漂白〉による価値中立化により、場合によっては評価が割れそうな元発言の文脈が見えなくされていたわけであるが、他方で、元文脈を少し追えば、むしろ評価が割れそうな場に出た「語録」が選定されていることが分かるものも複数ある。

このように、元発言が出た場を知っていることや、あるいはそれを追うことで、見えなくされていた文脈の痕跡をにおわせるという、〈痕跡の残置〉が——これも作り手の意図は判然としないが——なされているとも言える。

3.6. 質的な分析4：絵札を通して示されるもの

最後に、かるたの絵札に注目して分析を行いたい。かるたの絵札の要素として多く用いられているものをまとめると、以下の表の通りである。

表 4 絵札の要素として多いもの⁸⁾

要素	回数
他国の国旗	13
日本国旗	11
国内の政治家	6
こぶしを握る安倍元総理	6
前方を指さす安倍元総理	6
他国の政治家	3

なお、国内の政治家で登場しているのは、岸田文雄・茂木敏充・野田佳彦・安倍晋太郎・加藤勝信・小池百合子である。他国の政治家としては、D. トランプ・B. オバマ・N. モディであった。

加えて、回数としては1回しかないものの、興味深い絵札としては、「令和」の文字が入った額縁を掲げる安倍元総理という構図のものもある。

さて、以上のような絵札の傾向を踏まえると、まず回数の多いものからは、「国旗」や「政治家」のような、外交も含めた社交的人物として安倍元総理を表象する傾向が見て取れる。また、「こぶしを握る」「前方を指さす」といった構図からは、安倍元総理のリーダーシップの強さが表象されていると言えよう。

すなわち、絵札の構図からは、安倍元総理が、多くの人物や国・地域との交流を、ライバル性も含めて積み重ねてきた政治家であることと、強い政治的リーダーシップの持ち主であったことが示されることとなっている。

またさらに、回数としては1回であるが「令和」を掲げる安倍元総理の構図からは、現実から離れて、政治的な実績を安倍元総理のものとして位置付ける表象も見て取れる。周知の通り、この額縁を掲げたのは——少なくともそのイメージが流通しているのは——菅義偉官房長官(当時)であり(例えば2021年4月30日付『読売新聞』)、安倍元総理ではないのだが、改元時の総理大臣であった安倍元総理の実績と化すような表象となっているわけである。

以上のように、「語録」の選定においては、特定の——場合によっては現実とは異なる——文脈を「語録」に付与していく、〈再文脈化〉も行われていると言える。3.3節と3.4節で見たような、文脈を外し、また漂白するようなことも行われつつ、同時に特定の文脈を「語録」に与えていくこともなされているわけである。

4. 考察

ここまで、「アベノゴロかるた」における「語録」に着目し、その選定基準と思われるものをいくつか析出してきた。本稿においては、第1に無数にある発言から特定の語録を絞り発言者の性格を確定させる〈焦点化〉、第2に元発言が有していた具体的文脈から一般的文脈に置き直す〈脱文脈化〉、第3に評価が割れそうな発言を避け“色”を消し価値中立化する〈漂白〉、第4に見えなくされていた文脈の痕跡をにおわせる〈痕跡の残置〉、第5に特定の文脈を「語録」に与える〈再文脈化〉の5つがそれである。

さて、こうした5つの選定基準があることで、いかなることが生じるのか。こと「アベノゴロかるた」に限定して考えれば、まず、〈脱文脈化〉と〈漂白〉により、毀誉褒貶の多い政治家であった安倍元総理からそうした色が消され、多くの人が受容しやすくなる。言うならば、安倍元総理という固有性と具体性を強く帯びた人物が、汎化されていく。続いてさらに、〈焦点化〉と〈再文脈化〉により、安倍元総理の注目すべき点が強調され、毀誉褒貶の内「毀」「貶」の元となっていた要素が後景化する。他方で、そうした「毀」「貶」の元となっていた要素をむしろ好む人々への目配せもなされる。すなわち、〈痕跡の残置〉によってそうした人々からの受容も保持できるよう、一見そ

れとは分からない形で、「毀」「貶」の元となっていた要素を生んだ安倍元総理の固有性も残される。

このようにして、安倍元総理の無数の発言の中から「語録」が選定され、それによって言うならば、〈理念型としての安倍元総理〉が形成されていく。なおここで言う「理念型」とは、M. Weber による「実在の叙述そのものではないが、叙述に一義的な表現手段を与えてくれる」(Weber, 1904=1998:112)ものを指す。この〈理念型としての安倍元総理〉こそが、実在の安倍元総理から導き出された、「偉人」としての「表現手段」を帯びた、安倍元総理であると言える。

以上のような安倍元総理の「偉人化」はもちろん、「偉人化」がなされていくプロセスの一形態に過ぎない。しかし他方で、これまでの歴史学的研究(及川 2017)と同様の問題意識に立ちながら、現代社会における「偉人化」を、かるたにおける「語録」という新たな観点から見る可能性を示唆した点で、本稿は意義のあるものと思われる。かるたのような遊具は、取るに足りない、考察に値しないものと思われがちだが、M. Kelly (2022)の指摘も踏まえれば、そこから創出されるものも存在する。また、1.1で示した通り、「アベノゴロクかるた」が、児童の遊具ではなくむしろ成人の遊具とされている状況を踏まえれば、取るに足りないものとして軽視することもできない。取るに足りない単なる冗談の“ネタ”として軽視している内に、その“ネタ”を通して社会が変容していくことは十分にありうる(北田, 2005)。一見取るに足りないものであるからこそ、そこに潜む機能を析出することが重要となる。

本稿で見た通り、安倍元総理は、「語録」と共に「偉人化」されていく只中に置かれている。そのことの社会的重要性は、例えば高市総理が安倍元総理の「語録」を用い、自身の政策的立場と安倍元総理を結合させ、自身の支持につなげようとしていることが示唆している。こうした、現代社会におけるイデオロギー装置の萌芽に目を向けることもまた、重要な作業となるだろう。安倍元総理を「偉人化」する機制の中心地である山口という地で教育と研究を行う我々であるからこそ、こうした「偉人化」を相対化しつつ、地域における「偉人」をめぐる認識を検討する必要がある。「偉人」を想起することは、「歴史的・社会的な拘束性のもとにある」(及川, 2017: 418)。だからこそ我々には、「想起にうかがわれる同時代的条件からの規定、慣習化の力学によって過去からもたらされている傾向性の所

在を明らかにしていくこと」(及川, 2017: 418)が求められるのである。

なお本稿にはいくつかの課題も残る。

第1にそれは、「語録」の元発言そのものの分析が行えていない点である。「アベノゴロクかるた」に選定された「語録」には、国会での発言は少なくメディア経由の発言が多いこと、また、世耕弘成関係の発言が多い傾向が見て取れる。なお、世耕は自由民主党で広報関係の部署を歴任し、安倍内閣でも広報担当の総理大臣補佐官に就任した人物である。すなわち、広報戦略に重きを置いた「語録」の選定がなされていることがうかがえる面もある。現在世界を席卷している、個人崇拜とポピュリズムが結びついた「権威主義的ポピュリズム」(Inglehart and Norris, 2019, Juan-Torres, 2024)といったものも踏まえ、「語録」がどのように人々に差し向けられているのか探ることも今後必要となる。

第2の課題は、他の人物の「語録」との比較が行えていない点である。本稿でも少し触れたように、宗教家や芸能人の「語録」とこの「アベノゴロクかるた」との異同はいかなる部分にあり、それはどういう意味を持つのか。そもそも政治家という職業が、その職能の中心に演説やスピーチがある以上、安倍元総理の発言が「語録」になり、そこから「偉人化」が進むのは、むしろ分かりやすい。一方芸能人やスポーツ選手のような、発言そのものが職能の中心にくるわけでもない人々の「語録」が作られるのは一体どういう背景からなのか。こうしたことを検討するための比較分析も必要となる。

また、第3にして最大の課題は、本稿が「アベノゴロクかるた」の表象の分析に留まっている点である。表象と、それへの受容は必ずしも一致しない。すなわち「アベノゴロクかるた」とそれによる〈偉人化〉がどのように受容されているのか、その点の分析も行うことで、本稿における分析と考察はより総合的なものとなる。

以上のような課題があることを最後に指摘した上で、本稿を閉じることとしたい。

【引用・参考文献】

安倍晋三デジタルミュージアムプロジェクト, 2024, 『若者が選んだ安倍晋三 100 のことば』幻冬舎。
別冊宝島編集部編, 2024, 『安倍晋三 100 の言葉』宝島社。

- 円堂都司昭, 2024, 『坂本龍一語録——教授の音楽と思考の軌跡』 ぱる出版.
- 後藤光村, 1926, 「日本撰述臨濟語録の解題」, 『禪學研究』, Vol. 3, pp. 103-132.
- 原口尚彰, 2024, 「福音を伝えるログア(語録集)——トマス福音書の文献学的考察」, 『聖書と神学』, Vol. 35, p. 17-36.
- Inglehart, Ronald, and Norris, Pippa, 2019, *Cultural Backlash: Trump, Brexit, and Authoritarian Populism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 石橋愛架, 2025, 「自習用かるた教材を用いた地域連携によるうそ電話詐欺対策フェアの実践」, 『鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編』, Vol. 76, pp. 83-95.
- Juan-Torres, González, Miriam, 2024, *Fear, Grievance, and the Other: How Authoritarian Populist Politics Thrive in Contemporary Democracies*, Berkeley: Othering & Belonging Institute.
- Kelly, Michaela, 2022, *Patriotic pedagogy: How Karuta Game Cards Taught a Japanese War Generation*, Leiden: Brill.
- 北田暁大, 2005, 『嗤う日本の「ナショナリズム」』 NHK 出版.
- 小松清生, 2025, 「地域で学び 地域で育つ(1)——『五箇荘歴史かるた』がひろげる地域の輪」, 『歴史地理教育』, Vol. 979, pp. 78-81.
- 増子保志, 2015, 「創られた戦争美談——肉弾三勇士と戦争美談」, 『日本国際情報学会誌』, Vol. 12, No. 1, pp. 27-35.
- 長浜博, 2023, 「イメージの教育——上原輝男語録に見るその基本的な考え方」, 『国語教育思想研究』, Vol. 29, pp. 32-39.
- 中内敏夫, 1988, 『軍国美談と教科書』 岩波書店.
- 小川隆, 2024, 『禅宗語録入門読本——禅の物語で学ぶ漢文の基礎』 禅文化研究所.
- 及川祥平, 2017, 『偉人崇拜の民俗学』 勉誠出版.
- 恩蔵茂, 2022, 「安倍晋三命懸けの名言集」, 『Will2022年11月号』, pp. 194-211.
- 大蔵誠, 2025, 「江田五月の『民主主義』——議長時代の語録から探る」, 『議会制民主主義研究』, Vol. 2, pp. 115-126.
- 上野英信, 1989, 『天皇陛下萬歳——爆弾三勇士序説』 筑摩書房.
- Weber, Max, 1904, “Die »Objectivität« Sozialwissenschaftlicher und Sozialpolitischer Erkenntnis”, *Archiv Für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 19: 22-87(富永祐治・立野保男訳, 折原浩補訳, 1998, 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』 岩波書店.)
- 『Will』編集部編, 2022, 「安倍晋三命懸けの名セリフ」, 『Will2022年11月号』, pp. 192-193.
- 山室建徳, 2007, 『軍神』 中央公論社.
- 【参考 URL】**
- 安倍昭恵のスマイルトーク, 2024, 「『アベノゴロかるた』 ネット販売開始」, <https://akie-abe.jp/blog/983> (最終アクセス: 2025年11月13日)
- アベノグッズ, 2025, 「アベノゴロかるた」, <https://abenogoods.official.ec/items/91281750> (最終アクセス: 2025年11月13日)
- 安倍神像神社, 2024, 「安倍神像神社」, <https://abe-shinzo-shrine.net/> (最終アクセス: 2025年11月13日)
- ANNnewsCH, 2015, 「戦後70年談話安倍総理会見ノーカット3 (15/8/14)」, https://www.youtube.com/watch?v=cSj6b_uuV0 (最終アクセス: 2025年12月10日)
- 近畿大学, 2022, 「【近畿大学卒業式】元内閣総理大臣 安倍晋三氏によるスピーチ全文」, <https://kindaipicks.com/article/002455> (最終アクセス: 2025年12月10日)
- 田中明彦研究室, 2025a, 「データベース『世界と日本』」, <https://worldjpn.net/documents/texts/PI/20151006.01J.html> (最終アクセス: 2025年12月10日)
- , 2025b, 「データベース『世界と日本』」, <https://worldjpn.net/documents/texts/pm/20070126.SWJ.html> (最終アクセス: 2025年12月10日)
- 【注】**
- 1) いずれも肩書は本稿を執筆している2025年11月現在のものである。この後言及する他の議員も同様である。
- 2) 例えば吉田議員の場合は <https://x.com/yoshida706/status/1809359471132717467> にて、杉田元議員の場合は <https://www.facebook.com/miosugita.official/posts/pf>

bid02xR1RwBSzWfMB6Kz2RLWb4WHecogZgHGGMmDDUKVGjf6KxX
AjjJL3EtwWsEw4AygNl にて投稿を行っている。なおいずれ
も 2025 年 11 月 13 日に最終アクセスした。

3) 語の共起傾向を測る係数で、0 から 1 の間の値を取り、
1 に近いほど共起の傾向が強いということになる。

4) 「アベノゴロクかるた」に同封されている解説書記載の
年表を基に筆者が作成。

5) 「語録」の元発言がいつのものか判明しなかったもの。

6) 何度か発言しているものが「語録」になったもの。具体
的には、何かを食べて「ジューシー」と評する発言。

7) ここで取り上げた例以外にも、「アベノゴロクかるた」
において「ルールはしっかり守る。マナーもしっかりして
いた。ゴルフをすると、性格や人格が分かる」と、一般論
的にトランプ米大統領(当時)を表するものとされていた

「語録」が、実は元発言では「ゴルフを一緒にすると、意
外といろいろな性格、人格がわかるんですが、ルールはし
っかりと守る。たまにルールを守らない人もいますが、ル
ールはしっかりと守るし、例えばバンカーに入れてしまっ
た後、打った後どうするか。ちゃんとそれをきれいにする
かどうかということも、そういうマナーもしっかりとして
いる」(第 193 回国会衆議院予算委員会第 11 号) と、ど
ちらかというとゴルフを主題としたものであった等もある。
改変しないと趣旨が分かりにくいといった理由もあるの
だろうが、このように、大きな改変が施されることで、脱
文脈化され具体と詳細を削ぎ落した「語録」となっている
ものが多い。

8) 分類基準は筆者の主観による。複数要素が入った絵札
も当然あるが、その場合は重複してカウントしている。ま
た、安倍昭恵氏の掲載された絵札も 1 枚あり、安倍昭恵氏
は政治的な活動も行っているが、「私人」であるため除
外している。